

2024年ブラジル研修旅行の報告 II

ブラジルで出会った隣りびと

長谷川りゑ子（林間つきみ野教会信徒）

はじめに

2024年8月に「ラテンアメリカ・キリスト教」ネット（＝ラキネット）から「解放の神学」研修の招待を受けた川浦弥生牧師とともに、ブラジル研修旅行に参加しました。2016年10月に農村伝道神学校（農伝）で参加した「講演と対話 教皇フランシスコと解放の神学—ラテンアメリカ、そして日本から考える」、2018年7月に聴講した大倉一郎先生の集中講座「世界キリスト教史」で学んだ「解放の神学」の実践の場であるブラジル研修に出発できることになったのです。『ポーボの風を受けて—「ラテンアメリカ・キリスト教」ネット運動 10年史・エッセイ・史料集—』（ラキネット出版、2020年）を読み準備しました。

サンパウロで（8月2-5日）

サンパウロ1日目、到着して直ぐに小井沼眞樹子さんが近くの通りで開かれているフェイラ(青空市)に連れていってくれました。魚介類が豊富で、果物、野菜が豊かに並びます。オレンジの味見をさせてくれ安価に買うことができ生活していけるな～と思いました。

2日目、眞樹子さん一人では案内できないという地域を在ブラジルの岡村淳さんが案内してくれました。セー広場近くで同じ柄の毛布が路上に置かれているのを何枚も見ました。路上で暮らす方々に配布している毛布だと思います。飼犬と一緒に路上で暮らす方が市民と話す光景、銀行の脇に二、三人が座っている姿もありました。

4日目、ベルボ聖書センターでシゲ神父(中ノ瀬重之神父)の10日間聖書集中講座の初日に参加することができました。民衆の視座から聖書を読み直す講座で旧約聖書を学びました。部族連合とギリシャ文化を土地・労働・生産・生活・組織・Deus(神)に分けて黒板に書かれた表を書き写し、民数記、第2イザヤ、コヘレトの言葉の聖書箇所をノートしてきました。黒板にたくさん書かれた図と、ポルトガル語を眞樹子さんが通訳してくれノートしたことを学びたいと思います。講義の合間に時おり皆が立ち上がり、タンバリンが鳴り、ブラジル各地や他の国から集まった参加者からの鈴や楽器も響き、皆が思い思いに踊り歌います。広大な敷地で自然に囲まれた落ち着いた建物で学ぶ講座に日本から神学生を送りたいと強く願いました。

ノルデスチ(北東部)に移動して、オリンダ・レシーフェ(6-8日)

美しい海を見下ろすオリンダで、眞樹子さんと20年来の親友、ジャニ・メネゼス・ブラックバーンさんが迎えてくれました。彼女はアルト・ダ・ボンダージ・メソジスト教会の信徒リーダーです。

アルト・ダ・ボンダージ教会の祈祷会では、アカペラ、楽器、様々な音楽グループの完成度の高い発表のように始まった祈祷会のなかで、川浦弥生さんが映像「沖縄の歴史と教会の働き」を使い、沖縄と琉球の文化・食べ物、琉球処分、沖縄戦の歴史、米軍施政下、日本復帰後と現代の問題をポケトーク(ポケット通訳機)で話し、私も一緒に話しました。映像の文字はポルトガル語。平良修牧師が米軍施政下にフェルディナンド・T・アンガー第5代高等弁務官就任式に祈祷牧師として招かれ祈った祈りを皆さんに交替で読んでもらいました。熱心に沖縄の映像を観て聴いてくださいました。そのあとタンバリンや鈴で皆でリズムカルに踊り、私たちも立って輪になって踊りました。そしてアグアイルド牧師と青年たちから祈祷と祝福をいただきました。

大勢集まっていた子どもたちは、ポケトークを使って私たちと話したりスマホで写真を撮り合い、農伝の竹コマで遊んでくれました。

翌日の午後にジャニさんと教育活動コーディネーターのドリソニャさんがアルト教会地区の保育園と、教会員関係のお宅を案内してくれました。お宅でグラスのお水を出してくださる教会員もおられました。ご病気の方のお家を訪問し、コーヒーとお菓子をいただきました。教会員の方々のお家がきれいになっていくのをジャニさんも喜んでいる様子でした。雑然と家の中も外も区別なく片付けられていないお家もあり少女とお母さんがいました。テーブルのうえに農伝後援会の竹コマがありました。前日の祈祷会でプレゼントしたものです。少女が竹コマを回し、お母さんは竹コマを逆さにして器用に回してくれました。このお宅もだんだんに片付いていくように、少女と保育園の子どもたちの成長が見守られますようにお祈りします。

アルト教会での教育活動、ギター教室と空手教室見学、その後の保護者の方たちとのお話しのまえに、Suely Arquinoさんのお宅で夕食を用意くださりCapim Santoという飲み物をいただきました。カピン・サント、聖なる草という意味で日本ではレモングラスティ。農伝にもレモングラスがありよく飲んでいきます。親しみを感じました。

ジョアン・ペソアへ(9-11日)

バスでジョアン・ペソアへ移動しました。マルーシさん、セビリーノさんのすてきな自宅に泊めていただき、翌日の子どもたちへのプレゼント、折り紙の羽ばたく鶴を40羽折

りました。翌朝、マルーシさんたちがマリア・ガレーガさんのお宅まで送ってくれました。街なかから外れ軌道を越えていくと貧しい地域に入ります。マリアさんたちのカトリック教会の共同体の活動、子どもたちのための日曜日の朝食会に 60 人近くの子どもたちが集まっていました。奉仕者のお話、わたしたちの紹介のあと、朝食会。この建物は壁が崩れ、屋根も不十分で補修に 900 万円 (?) 以上かかるということでした。ここでもポケットークが大活躍。子どもたちはすぐに使いこなして会話をしました。

そのあとマリアさんがその地区の可愛らしいすてきな教会に案内してくれました。正面は水色の壁に十字架のイエス、側面にイエス像と黒いマリア像、赤いハートに 4 つの文字「宗教・宣教・教会・慈善」と書かれています。けれども「この教会に司祭は来なくなった」とマリアさんは悲しそうでした。教区本部の教会に出席するという方針になっていました、それから地区の通り、家々、沼地を案内してくれました。朝食会で会った男の子たちがうれしそうに駆けて追いかけてきます。

マリアさんのお家にもどり休み、マリアさんが計画してくれた近所の方たちの持ち寄りの昼食会の準備を待っていると、男の子たちが鉄扉を開けて遊びにきました。入り口で靴を脱いで入ってきます。ポケットークでおしゃべりをして何度か出入りをして、棒付きキャンデーとガムをプレゼントしてくれました。

昼食会はたくさんのごちそうとデザート、大勢の人が集まり食事と会話を楽しみました。赤いドレスのおばあさん、お話し好きなおじさま、マリアさんもワンピースに着替え、ほかの方のドレスの柄もすてきです。そのなかにマリアさんの孫娘、10 歳のアリッセがいました。子どもたちとも大人とも会話し賢く凛とした可愛い少女です。近所で足腰の悪いお父さんと二人暮らし、昼食会ではピンクの T シャツでしたが、夜のミサへは白い T シャツで現れました。車で教区本部の教会へ出発します。300 人近く集まれる大きな教会です。私たちはミサが始まるまえに奥の部屋で神父に挨拶しました。ミサのコーラスは素晴らしく音楽会のように楽しみました。ミサのあとでアリッセがポケットークで「わたしたちの教会を見せてあげるよ」と言いました。昼間にマリアさんが案内してくれた地区のすてきな教会です。アリッセにも大事な教会なのでしょう。マルーシさんたちが車で来てくれました。それで「マリアさんが連れて行ってくれたよ」と水色の教会の写真を見せるとニコッと微笑みました。川浦弥生さんと私がポケットークで「日本に遊びに来てね」というと「行かない」とはっきりしています。お父さんが心配か、マリアさんのそば、この街を離れたくないのか。「それでは私たちがまた来るね」というとうれしそうに頷き、ずうっと手を振って別れました。

サルバドールへ (12-15 日)

翌日、マルーシさん、セビリーノさんが空港まで送ってくださりサルバドールへ移動しました、サルバドールでバーハ海岸を散歩しました。ジョアン・ペソアではマルーシさんたちがアフリカに一番近いブラジルの岬を案内してくれました。バーハ海岸も西アフリカに近い海岸で 16 世紀からたくさんの黒人が奴隷としてアフリカから連れて来られたところです。

サルバドールで初めに CESE(セゼ)を訪ねました。The Ecumenical Coordination of Service (Coordenadoria Ecumênica de Serviço: CESE)。1976 年に 6 つの教会が設立した主に女性のための人権団体。ソーニャさん(合同長老教会牧師)とビアンカさん(ブラジル聖公会牧師)が映像で活動を紹介くださり、私たちは映像「沖縄の歴史と教会の働き」を紹介し、一緒に話しました。女性への暴力が世界で 5 番目、女の子や女性も含め女性殺害が多いなかで、以前は見えないものが見えるようになった。報告書を出した専門家は CESE。ブラジル全土での女性運動を支援。最も貧しい人たちを支援する。社会に目を向けて教会がどこに立っているか見る。魂が救われるだけでなく肉体の救いが必要。という言葉が力強かったです。そして原理主義についての学びをしながら、宗教原理主義に反対する活動は 2025 年で終了、続けるには資金が必要ということでした。お二人から「あなたがいるからこそ、わたしがいる」Pia do Upuntu とアフリカの言葉をいただきました。

家が積み重なって建っている貧困地区の中にあるヴァレリオ・シルヴァ合同教会でも皆さんが「マキーコ」と迎えてくれました。眞樹子さんが 22 年まで 6 年間宣教奉仕をした教会です。青い空のような色の新会堂でした。隣りのコミュニティセンターにはミシンがずらりと並んでいましたが、今はミシン裁縫はあまり好まれず、ほかの手芸が模索されているようでした。

その後、路上生活をしていた方たちのトリンダージ共同体を訪ねました。ここは教会ではなく、古い教会を借りて 2000 年から始まりました。敷地には家がいくつもあり、会堂のなかで暮らしている方々もおられます。私たちが到着したとき、人参など野菜を細かく刻んでいました。眞樹子さんは昼食づくりのボランティアをしていたそうです。眞樹子さんの焼きそばがみんな大好きで「マキーコ」と喜んで迎えてくれました。庭は草花と樹木がいっぱい、ペンキで塗られた古タイヤが花壇になっていました。会堂に掲げられた絵は母子像、三位一体画、イエスと食卓を囲む人々、女性と子ども、みな褐色の肌をしていました。

夜になり礼拝の時間になると外部からの参加者も集まってきました。CESE のソーニャ夫妻も来られました。会堂の前のほうはマットのうえに画用紙や色鉛筆が置かれ子どもたちの席です。長ーいテーブルを囲んで円形に座りミサが始まり私たちも聖餐に与りました。そして午前から準備されていた野菜などが美味しいスープになって長ーいテーブルに並び

パンとともにいただきました。

このトリンダー共同體は毎年12月24日に「陸橋の下クリスマス」を行い、まだ路上にいる方や多くの市民も集まりともに祝っています。フェイスブックで時どき見えています。

ブラジリアで（16-18日）

ミゲル神父が呼びかけてくださったエキュメニカルな対話集会「21世紀の解放の神学を展望」が聖公会大聖堂で開かれました。

「路上生活の人が増加している」と話した聖公会の女性主教は、飲料水がない、食べ物がない彼らの時間、痛みを聴く。彼らといっしょにいて、彼らの経験を理解し共有して一緒にできることをすると言われました。路上で暮らす方たちのために何かをするのではなく、路上で暮らす方たちと経験を共有することを学びました。

「皆さんの意思に団結を感じてください」と言う方。小さい会衆、宣教師、地上にあるものがつよい。解放の神学につよさを感じる。十字架につけられた者の弟子であるから。

「教皇フランシスコは若者に呼びかけている」尊厳と自然、新しい経済、精神性を言われた方に応えて、「私たちは一人ではない」と言われた方、私たちはコミュニティとして家があり恵まれない人もいる。誰も不足することなく持っている人が、持っていない人と共にする福音。

「この教会は共にいる。霊性が私たちのなかに働いている」が心に残り、民衆からのキリスト教、平等な「解放の神学」が活着していることを感じました。

翌日はブラジリア・カルチャーセンターでのミサのあと、映像「沖縄の歴史と教会の働き」を観られる場をミゲル神父が用意くださいました。そして映像で琉球処分、沖縄戦、米軍施政下での平良修牧師の祈り、現代の辺野古新基地建設反対運動、宮古島・石垣島の自衛隊ミサイル基地配備問題を伝え、対話が続きました。沖縄と台湾、中国、アメリカ、日本の関係、沖縄と東京について考える必要を感じました。

ラキネット・ブラジル研修「解放の神学」を振り返って

サンパウロ福音教会での落ち着いた礼拝の時間、そして海苔巻や美味しい煮物、デザートなど手作りの愛餐会で子どもたちと交わり、その後に映像「沖縄の歴史と教会の働き」を観てもらいました。最終日に戻ったサンパウロ福音教会でデイサービス「シャローム」に参加して、朝の検温・おやつ・体操・うた・ゲームを体験して、滋味深い昼食をいただき、豊かなときを抱いて空港に向かいました。

サンパウロのイビラブエラ公園、カテドラル、市場、日本移民資料館、地下鉄も旅を豊かなものにしてくれました。サンパウロを案内くださった記録映像作家の岡村淳さんが農

伝の環境改善ワークショップ指導者・坂田昌子さんを主人公に撮影・製作した映像作品『リオ フクシマ』があり、地球の反対側・日本の農伝で、その偶然に騒いでいたそうです。

オランダでは木を巧みに彫った土産物の小さなハウスをジャニさんが教えてくれました。レシーフェのドン・エルデル・カマラ資料館、アートセンター、ブックショップ・カフェ＝ジャニさんのお孫さんが珈琲焙煎家として働いています。

サルバドールの奴隷市場・ペロウリーニョ広場で有名なバッテリーグループの太鼓行進に出会い、幾つも訪れた歴史建造物や史料館がわたしを豊かにしてくれました。

ブラジリアのアライアンス教会のキラキラ会「小さな島の願いと祈り」というよく準備くださった会でも映像「沖縄の歴史を教会の働き」を紹介し沖縄の話ができました。日本語を学ぶ青年ガブリエルにも出会えました。安井牧師が案内くださったブラジリア観光で、国会議事堂・最高裁判所・大統領府に囲まれた三権広場が印象に残りました。レリーフ、モニュメントもあり、何より広々とした三権広場で市民が集会できることが、日本の国会議事堂まで狭い歩道でアピールする現状に較べ目標とする思いでした。

ブラジルの大きな女性運動「マルガリーダの行進」には出会えませんでした。眞樹子さんが依頼したガイドとともにイグアスの滝を見せていただきました。想像を遥かに超える自然に圧倒されました。

解放の神学研修を豊かにしてくれたものは本当に多くのものがありました。

おわりに

ブラジリアの対話集会でも語られていたパウロ・フレイレの著書を私が読んだことがないことは「解放の神学」研修のスタート地点が違っていたのではないかと思います。帰国して今年 2025 年 2 月に農村伝道神学校で、大倉一郎先生の「グローバルキリスト教史ーグローバル宣教史と戦後日本の教会」集中講座 4 日間を再び受講しました。

ジャニさんに案内いただき、大倉先生も立ったオランダのセー大聖堂に私もいたことから、ドン・エルデルを想いたい。

私の学びは始まったばかりです。